

僕の存在を書き換える力は、いわゆる催眠術とか、そういったものとは根本的に異なる。

相手の存在そのものの定義を変えてしまうことで、いわば存在を『再構築』する能力だから、弄っている部分の深さが全然違うんだ。

記憶などは（その部分を書き換えない限りは）そのまま残っているが、存在の重要な部分の定義を書き換えられた相手は、突然真理に目覚めたか改宗でもしたみたいに、以前とはまるっきり別人のように変わってしまう。

そして大事なことだが、一度書き換えた相手は、僕自身でも完全に元には戻せない。

一度こね回して形を変えてしまった粘土は、また以前と似たような形にこね直すことはできても、寸分たがわず元の形に戻すことはほぼ不可能なのと同じ理屈だ。

書き換える前の文章を記憶しておいて、一言一句違えずに元の文章を再現したとしても、やはり完全に元の状態じゃない。

存在を書き換えていた間に生じた、その人間の全体的な雰囲気であらわす部屋の内装の変化や、定義の微妙なニュアンスの違いをあらわす文字の筆跡なんかまでは、元通りには再現しきれないからね。

僕が書き換えた以前の霧江優華先生や幼馴染みの柏木理央は、その意味では永遠に消滅してしまったのであって、いつか元に戻してやろうと思ったとしても、まったく同じ状態で帰ってくることはもうないわけだ。

だが、別にそれは特別なことじゃない。

存在なんてのは別に僕的能力や催眠術なんかで弄ろうとしなくても、毎日毎時、周囲の影響を受けて少しずつ変化していく。

昨日と同じ自分はもう永遠に消滅して二度と戻ってこない、というのと同じことでしかない。

少なくとも、僕はそう割り切っている。



「要は書き換えたことで、相手を不幸にしたりしなければいい、ってことなんだよねえ」

僕は近所のとある喫茶店の入り口に立ちながら、そう呟いた。

この店の女店主、如月唯奈さんは、数年ほど前に旦那さんを失くして以来、ずっと一人で店の経営をしていた。

どうも、一生を寡婦として過ごすつもりらしい。

まだ二十代の若い女性で子供もいないというのに、なんとも気の毒でもったいないことである。

だから僕は、彼女を少しばかり書き換えてあげることにした、というわけだ。

「如月唯奈は、獅童蓮斗のことをとても深く信頼している」

「如月唯奈は、獅童蓮斗からの助言に真摯に耳を傾け、それに従うことが正しいと信じる」

それだけの内容を先日来店したときに彼女の定義に書き加えて、今日話したいことがあるから店を開けずに待っていてくれ、と伝えてある。

ついでに、男と二人きりで話すんだから、少し大胆に誘うような装いをした方が礼儀に合うよというようなことを吹き込んでおいたけど、はたしてどんな格好をしているだろうか。

僕は少し期待しながら、『本日休業』の札がかけられた店のドアをノックした。「どなたですか？」

「僕です」

「ああ、蓮斗くん。待っていたわ、入って」

中に入ると、如月さんがカウンターの向こう側から出てきて出迎えてくれる。

僕は、彼女の服装をチェックした。

(うん、セクシーじゃないか。やっぱりまだ若い未亡人だけあって、しっかり着飾ると色気があるよね)

彼女は薄手のブラウスを着ていて、胸元を大きく開いて豊かな膨らみの谷間を見せていた。

スカートも短く、黒っぽいタイトスカートを履いていて、白い太腿が眩しい。

いつもより露出度が高いし、身体のラインもよくわかる。

普段の貞淑な未亡人を決め込んでいる彼女なら、絶対にしないであろう服装だった。

化粧もしっかりしているし、マニキュアも塗られている。

「その格好、似合ってますね」

「ありがとう。ちょっと恥ずかしかったんだけど……」

頬を染めながら微笑む如月さん。

僕は席に着くと、そんな彼女を手招きをして、隣の椅子を勧めた。

「ところで、今日ここに来た理由なんですが」

「ええ。何か、お話があるって？」

僕は頷くと、話を切り出した。

「不躰ですが、如月さんはまだお若いのに、再婚をなさらないんですか？」

「……まあ、そうね。考えてないかな」

一瞬驚いたように目を見開いた後、曖昧な笑みを浮かべる如月さん。

僕はさらに言葉が続けた。

「お子さんもないんでしょう。このまま、ずっと独り身で、この店で過ごされるんですか？」

「本当に、遠慮がないのね……」

如月さんは苦笑するが、腹を立てたような様子はない。

今の彼女の中では、僕はとても深く信頼できる相手だということになっているのだ。

「私はずっと、あの人の妻よ。そりゃあ、いい人だったんだから……」

しみじみとした口調で言う如月さん。

僕はそんな彼女の顔をじっと見つめながら、言葉が続けた。

「本当に、そうなのでしょうか？」

「……どういうこと？」

さすがに少し、むっとした様子を見せる。

僕は構わずに続けた。

「亡くなった旦那さん以外の男に興味がないのなら、どうして如月さんは今日、男と二人きりで会うことを承諾して、その上、そんなに着飾って出て来られたんですか？」

如月さんの表情が、初めて戸惑いのそれに変わる。

「それは……だって。あなたは、私の大切なお客様だし……。それに、私、蓮斗くんのこと……。信頼、してるから……」

「嬉しいです。でも、それだけじゃないですよ？」

僕は畳みかけるようにそう決めつけると、立ち上がって机の上に身を乗り出し

た。

「如月さん……いえ、唯奈さん？」

「な、なに？」

突然のことに、唯奈が戸惑ったような声を上げる。

「僕はあなたが、人生を無駄にしようとしているのではないか、それが心配なんです。だから今日は、あなたの真情を試させてもらいたくて来たんです。いいですか？」

「し、真情……？」

唯奈は、わけもわからず、どぎまぎしたような顔をしている。

「……その、心配してくれるのは嬉しいし、構わないけど。具体的には、何をやるの？」

僕はにっこりと微笑むと、そんな唯奈の肩に手を置いた。

「これから僕が、あなたを抱きます」

「……えっ!？」

唯奈はさすがに絶句すると、呆然と僕の顔を見返した。

僕は構わず、唯奈のブラウスのボタンに手をかけて、それを外しにかかった。

「ちょ、ちょっと待って！」

慌てたように僕の手を掴んで制止しようとする唯奈だが、僕は対照的に慌てず騒がず、彼女に諭すように言い聞かせる。

「これは必要なことなんです。人は、自分の気持ちが自分ではわかっていないことがよくあります。僕に抱かれてどう感じるかで、唯奈さんに本当にこの先、男が必要ないかどうかわかります。これは僕からの『助言』です」

普通ならもちろん、こんな戯言が通るはずもないだろうが。

書き換えられた今の唯奈は、僕がどんな戯言を並べようとも、それが『助言』ならば真摯に耳を傾け、その通りに従うことが正しいと信じるようになっている。

「そ、そういうものなのかしら？ 確かに、私も、自分が本当は何を望んでいるのか、わからないときがあるけど……」

「ええ、そうですね。人生は一度きりだから、後悔しない選択をしなくちゃいけない。だからこそ、自分を見つめ直す必要があるんですよ」

僕はそう言うと、そっとブラウスの前を開き、下着を押し上げている大きな膨らみに手を伸ばした。

「あなたの力になりたいんです。ね、いいでしょう？」